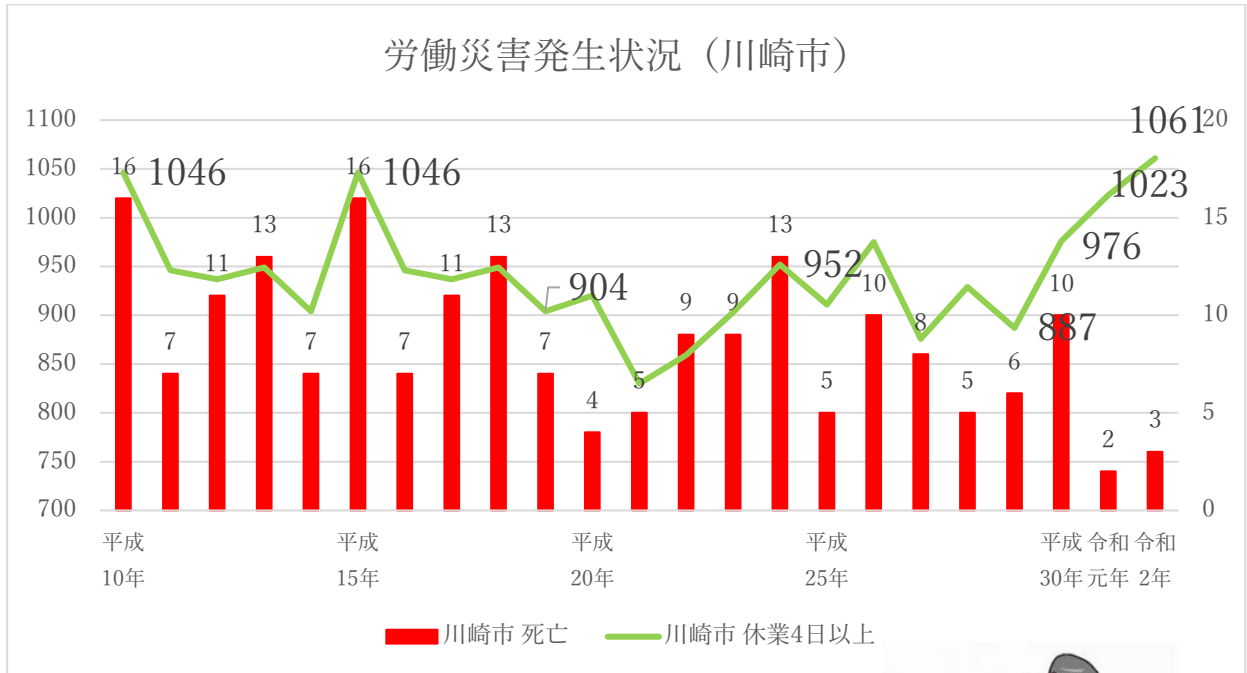




川崎市内の労働災害は、3年連続増加！！

～ 労働災害発生件数は、20年前の水準 ～ 川崎南・川崎北労働基準監督署

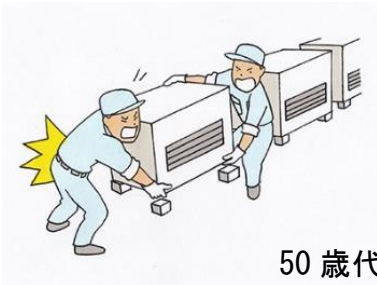


事故の型ワースト3

- 転倒 225件 (21.2%)
- 動作の反動・無理な動作（腰痛） 218件 (20.5%)
- 墜落・転落 170件 (16.0%)

3つの事故の型で57.7パーセントを占めています。

転倒して大腿骨骨折！休業6か月！ こんな労働災害が発生しています。



年齢別

- 60歳代以上 237件 (22.3%)
- 50歳代 276件 (26.0%)
- 40歳代 227件 (21.4%)

50歳代以上の労働者が48.3パーセントを占めています。

高齢労働者の発生率が高く、重症化しやすい特徴があります。



労働災害防止の取り組みは、形骸化していませんか？

危険の捉え方、対処方法について考えてみましょう！



Feel Risk!

～ 危険を感じとれ! ～

転倒災害は、あらゆる産業で発生しており、増加傾向にあり、高年齢労働者も多く負傷しています。

「危ないとは思わなかった」、「けがをすとは思わなかった」と多くの被災者が話しており、事業者も「危険はなかった」、「危ない作業ではない」など労使双方の危険認識が欠如していたことが労働災害の減少しない一因と考えられます。

一方で、転倒災害防止のための危険体感を取り入れ、体操、ストレッチなどの労働者の行動や認識に着目した安全衛生教育を行うなど安全意識を高揚させる取り組みを行い、数十年にわたり無事故・無災害を継続している企業もあります。

これまで、設備の本質安全化の推進により、安全柵や手すりの設置、安全装置の追加など職場環境は安全な職場に改善されているものと考えられますが、危険に触れ合う（感じる）ことが少なくなった分、労働者の安全意識は、低下しているのではないのでしょうか？

「労働災害が発生していないから安全！」と危険な作業を行わせている事業者、安心して危険な作業を行っている労働者がいるのではないのでしょうか？

労働者の危険な行動は、過去に失敗したことがないという経験則に基づき、行われていることがほとんどだと思いますが、作業方法や手順が定められていても守られていない、見過ごされている実態があり、これらを監視する視点が事業者や安全管理を担当する方にも欠落しているものと考えられます。

職場に潜む危険については、的確に把握して関係労働者が共通認識を持つことが重要となりますので、危険に対する感受性を高めるために

「**Feel Risk!**」を提案します。

危険をどのように労働者に感じさせるかは、事業者や安全管理を担当する方の熱意と創意工夫に委ねられています。

安全衛生情報はこちらから



職場のあんぜんサイト

